

薪森原の人形芝居

現代のようにテレビやDVD、マイカーなどもなかった時代、農村の娯楽といえば、春や秋の祭礼などに行われる芝居の興業が一番に挙げられるでしょう。

奈義町の横仙歌舞伎に代表される農村歌舞伎「地下芝居」は、かつては美作地域ではどの村でも盛んに行われ、芝居小屋を持つ地区も多くありました。

町内でもこうした芸能が行われていたことは、古老の話などで残されていますが、その中でも薪森原の人形芝居は、特筆すべき活躍をしています。

薪森原の人形芝居の起源は定かではありませんが、古くは「森原デコ」「森原人形」と呼ばれ、

言い伝えによると淡路から来た、門付け（家の門口で芸を披露することをなりわいにする者）の人形遣いが、借金のために夜逃げした際に置いていった人形に、いくつか買いつけたり小道具を作ったりして始めたという説と、地元の者が伊勢

神宮に参拝した帰りに大阪で文楽を見て、その魅力に惹かれて始めたという説があります。いつ頃から始められたのかもわかりませんが、江戸時代後半頃から断続的に行われていたようです。

明治時代になるとしだいに盛んになってきて、村外の各地でも興業していたようです。明治時代の後期には、淡路の浄瑠璃語りの豊竹栄大夫が来て、稽古をしていたこともありました。明治四十二年（一九〇九）には、栄大夫に依頼して、大阪文楽の座付人形細工師であった大江順右衛門の人形の頭を十二個送ってもらったといわれています。現在鏡野郷土博物館にはこの時のものと思われる

「大江順」の銘が入った頭が展示されています。

この当時に使用されていた女形小道具入木箱の蓋の裏には、当時の森原芝居のメンバーの名前が記されています。この頃、この人形芝居の一座名を「住吉座」とし、農閑期には苦田郡内はもとより、久米郡・勝田郡あたりまで興業し、お盆や彼岸、納涼祭の時には各地で引つ張りだこの人気を博しました。

昭和六年（一九三二）八月十五日、山陽新報社主催の郷土民謡小唄大会が岡山市で開催、ここで郷村青年団による人形芝居が上演され、観客から大喝采を浴びました。この時の演目は「絵本太功記」十段目で、当時の山陽新報には「・・・却々どうして巧みな使ひ振り 人形芝居の滋味をブチ撒けて万雷の拍手に退けず。」と、会場の雰囲気伝えていています。その後、戦時体制下の時勢により、



鏡野郷土博物館の展示室

人形芝居は途絶えてしまいましたが、昭和三十六年（一九六一）、美作地方民俗総合調査が行われた際に、薪森原の人形芝居が調査の対象となり、昭和六年に演じたメンバーの有志たちによって数十年ぶりに上演されました。

現在では、当時の演者たちもいなくなり、人々の娯楽も移り変わる中で、人形芝居が行われることはなくなりしましたが、当時の人形や衣装、台本や小道具は町指定有形民俗文化財に指定され、一部を鏡野郷土博物館で展示し、盛時を偲んでいます。

参考資料：『美作の民俗』、『鏡野町史』通史編

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733



薪森原の人形(頭は大江順右衛門作)



女形小道具と蓋の裏側に書かれた住吉座メンバーの名前(明治42年)